

やまなし

2008.2.1

vol.5

no. 2

contents

- 2 二つの文化
- 3 「近代文学文庫」所収コレクションについて
- 4 利用者の声
- 5 学生にすすめる本
- 6 OVID・MEDLINE・EBMR・ERIC
画面・機能がリニューアル
- 7 図書館トピックス
「電子ジャーナル利用講習会」を開催
講演会
「絵本の楽しみ-『ぐりとぐら』を中心に-」を開催
「緩和ケアがあって助かった」を開催
- 8 今後のイベント紹介

The Yamanashi
Bulletin of the University of Yamanashi Library

『二つの文化』

カガワ チアキ
附属図書館医学分館長 香川 知晶

2007年4月から、附属図書館の医学分館長を務めさせていただいています。前分館長の久保田健夫先生や事務の皆さんのおかげもあって、ほぼ1年近く経過し、ようやく分館の仕事がわかってきたかなというのが正直なところです。それまでは利用者として附属図書館にはお世話になってきました。しかし、その立場ではなかなか気づかない部分での仕事が利用しやすい附属図書館を支えていることも実感するようになりました。

私の専門は哲学・倫理学で、現在のところ医学部に所属する唯一の文系教官で、生命倫理学や脳神経倫理学といった応用倫理学と呼ばれる分野を研究しています。文系、理系という区別は大雑把なもので、場合によっては不適切な区別に過ぎないことも多いはずですが、研究の中心が応用倫理学にあることもあって、この単純な区別によって問題を整理することが有効なこともあるように思います。そんな風に思うのは、最近、C.P.スノーの有名な『二つの文化と科学革命』という小さな本を読み直したことも関係しています。

この本はずいぶん以前に翻訳(みすず書房、1967年)が出版されて、日本でもかなり読まれたと思います。スノー(1905-80)という人は物理学を研究し、ケンブリッジ大学の先生であっただけではなく、若い頃から小説も数多く発表しています。さらには、長年、英国政府の重要な役職にもありました。そのスノーが、1959年に行った講演が『二つの文化と科学革命』です。

この講演の内容は次のようなものです。スノーのいう「科学革命」は、20世紀前半の科学技術の急速な発展を指しています。その発達が西欧の知識人社会のなかに大きな亀裂をもたらしつつある、というのがスノーの診断でし

た。亀裂とは現代社会を構成する自然科学と人文学という「二つの文化」の間のコミュニケーション・ギャップを指します。理系の人間と文系の人間はそれぞれまったく違う言葉を使うことに慣れてしまい、相互に理解しえなくなっている。多くの科学者はディケンズの小説など決して読まないだろうし、文学者には科学のことはチンプンカンプンというわけです。スノーはそこに世界的な教育の質の低下があることを指摘し、人文系の人間が科学について知る必要性を強調しています。ともかく、スノーによれば、現代社会は共通言語をもたない二つの文化に分裂し、危機に直面しているのです。

このスノーの講演には批判の余地はあるでしょうが、現代社会が異なる文化に分断され、相互のディスコミュニケーションが大きな不利益をもたらしているという指摘はそう間違っていないでしょう。応用倫理学で生じている問題も突き詰めると、お互いに言葉が通じないといったところに根がある場合が多いように思います。そこでは、亀裂が生まれた文化の間にどのようにして橋をかけるのか、どのようにしてお互いに理解できる言葉で語るのかが、課題となっています。そこには教育の問題が大きくかわっているはずですが。

こうしたスノーの二つの文化論から話を飛躍させると、附属図書館も本学の統合によって本館と分館という体制に移行したわけで、それぞれ固有の歴史をもつ二つの文化の統一という実験をしていると見られるかもしれません。もちろん、ここにはスノーがいったような亀裂があるわけではありませんが、万が一にもディスコミュニケーションによる機能不全などに陥らないように、特に教官側が意識することも無駄ではないように思います。

「近代文学文庫」所収コレクションについて

ナカマル ノブアキ
教育人間科学部国語教育講座 中丸 宣明

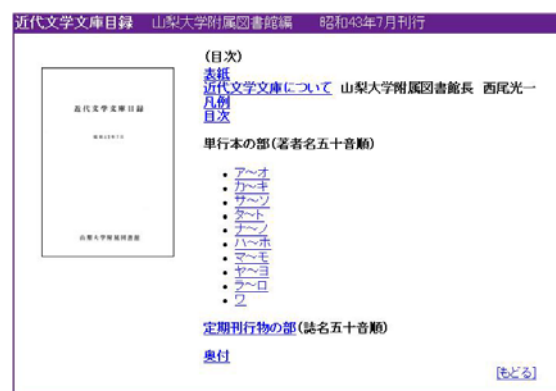
山梨大学附属図書館「近代文学文庫」は、昭和二十五年の発足以来、国文学教室（現在の国語教育講座）の歴代の近代文学担当教員が収集・管理にあたり、広く学内外の教育・研究活動に資してきたものである。その設立の経緯については、「近代文学文庫目録」（昭和43年7月）所載の西尾光一による「近代文学文庫について」という文章に詳しいので、そちらを参照願うとしてここで繰り返すことはしないが、その設立を推進した湯地孝の蒐集姿勢が本文庫を特色あるものとしていることは確認されておいてよい。

湯地孝は、蒐集に際して大きく三つの方針を持っていたように思われる。それは一つ目には、明治以来のいわゆる浪漫主義系統の作家の作品・関係雑誌の蒐集すること、二つ目には幕末明治期以来の政治小説や翻訳小説などの近代文学形成期の混沌とした文学資料の蒐集すること、そして最後には狭い意味での文学に止まらず広く文化的視野に基づいた言論資料の蒐集することである。最初の方針によって集められた与謝野晶子や谷崎潤一郎などの初版本の数々、あるいは雑誌「明星」や「すばる」は、本文庫のいわば「お宝」となっている。蒐集は資金と事情が許せば、自然主義へと手を伸ばされ、日本近代文学の主要作家・エコールへと拡張していったものと思われる。現に、それらの作品のいくつかはすでに所蔵されているのだ。まさにこの蒐集の指向性は「文学文庫」としての本道であった。一方二つめの指向性は、蒐集開始が昭和二〇年代の半ばということを考えれば、やは

り湯地の慧眼といわねばならないだろう。むしろ大正末以来、明治の文化・文学に関する関心は高まりを見せていたとはいえ、まだまだ一般には「文学」として認知されることの少なかった幕末・明治期の諸作品の蒐集は、現在「近代」あるいは「文学」といった概念が揺らぎ、ポストモダンの価値軸が問われている時代、多くの問題を提起してくれる存在となっている。そのことは、三番目の方針にも当てはまる。これらの蒐集方針は湯地の後任である内田道雄、野山嘉正、そして私と受け継がれ、少しずつではあるが維持発展してきた。

さらに二〇〇七年より、国文学研究資料館との共同事業として、本文庫所蔵資料をもととした復刻版出版もはじまり、さらなる研究・教育への貢献が期待されている。

近代文学文庫目録 山梨大学附属図書館編
<http://www.lib.yamanashi.ac.jp/collect/kin/kindai.htm>



知の空間

図書館は情報発信基地

大学院教育学研究科教科教育専攻 修士課程

県立中央病院 病理診断科

コシミズ イクコ
輿水 以久子オヤマ トシオ
小山 敏雄

私は高校の教員であるが、この1年間は内留の身である。緊張を強いられる現場を離れても、安きに流れてはいけないと、自分を律するつもりで図書館通いを始めたが、かえって図書館にいやされ、支えられる毎日である。

まず、職員の方の穏やかな雰囲気。文献検索の方法や、設備の使用法について尋ねた時も大変親切に対応していただいた。また、文献複写のリクエストは対応が速く、ある時など、欲しかった文献複写がリクエストの翌日に手元に届き、驚いたこともある。OPACでの文献検索や電子ジャーナルは、非常に便利で、図書館間のコンピュータネットワークの持つ利便性に圧倒された。私の学生時代は、図書館というと「巨大な自習室」というイメージでしかなかったが、現在は未知の世界を明るく照らす強力な力となっている。時代は変わったものだとつくづく思う。

居心地の良さと使い勝手の良さを兼ね備えたこのすばらしい知の空間で、今年度多くの時間を過ごすことができ、幸せだったと思う。先日、3階でパソコンを使っていたら、見知らぬ女学生さんに声をかけられた。文献検索の方法を教えてほしいと言う。しばらく話したところで、私が職員でないということに気づいたようだったが、知っている範囲の検索方法を伝えた。何ということはないが、図書館に少しばかり恩返しできたようで、うれしかった。

もう17年以上も前になるが、その頃は大学の職員だった。今から思うと生意気な助手だったと思うが、図書館の方々にいろいろ要望を言わせて頂いた。Cancerだったかの雑誌を外科で購入しているとの理由で図書館での購入雑誌から外された時に、外科だけじゃなくいろんな科が必要な雑誌をどうして切るのかと職員に怒りをぶちまけた時があったが、その後はちゃんと元通りになっていたのを覚えている。もちろん今考えれば自分だけの要望ではなかったかもしれないが、そのときはきちんと話を聴いてもらえたと思いうれしかった。

それから、20年弱の年月がたっても医学分館は利用させて頂いている。仕事柄もあって、中央病院の図書館ではとても雑誌が足りないのである。大学の持つ豊富な専門情報はとても大切である。そういった情報をもっと学外の人も利用しやすいように開放してもらいたいと私は常々思っている。

そういえば、だいぶ前に一般人の入館も受け入れたとの話を聞き、素晴らしいことだと思った。図書は利用したい人のためにあるものだから、それこそが本来の図書館の役割であり、地域への貢献と思われる。紛失や盗難、損傷などいろいろ問題はあるとは思いますが、利用されずに埋もれるよりも利用される方が図書にとっては本望なのではないかと考える。

これからはますます電子化が進み、図書館の存在意義は何なのかと問われてきていると思うが、図書館の役割はいつも情報発信基地であると私は信じている。時代の要望にいつも敏感に対応し、利用しやすい情報を提供することは時代を超えて変わらないものではないかと思う。

図書館の方たちには、いつも感謝しています。



『物理学に基づく環境の基礎理論：
冷却・循環・エントロピー』

■ 勝木渥著 海鳴社

工学部電気電子システム工学科 ^{ヤスイ マサル} 安井 勝

「地球温暖化防止」を錦旗にして、地球生命系の頂点に立つ（とうぬぼれている）ホモ・サピエンスが大騒ぎしています。もちろん、最重要課題です。しかし、「CO₂を減らせばよい」で済むほど生命系は単純ではありません。では、どうなっているのか。このことを「物理学的」に考える時の参考書が本書です。著者は次のように主張されています：『今、環境や生態系の破壊が恐ろしい勢いで進行しつつある。これを食い止め、地球を生命の存在しつづけることのできる惑星として保持することが、現在の人類の最重要の課題である。環境・生態系破壊の実態についての、正当な (right) 危機意識に基づいた記述や研究は数多くあるが、それらはなお現象論の域にとどまって (left) いて、まだ科学にはなっていないように、私には思われる。ある学問が、現象論から科学になるためには、それを科学たらしめる鍵となる概念の把握が必要である。環境学が、環境現象学の域を脱して環境科学になるために把握されるべき基軸概念、それはエントロピーと物質循環である。／われわれは、暗黙裡に、環境とは、われわれの周りにある自然、すなわち、森や緑の山々や、汚染された海や、きれいな水の流れる川や、汚れた大気等々のことだと思っている。たしかに、われわれの周りの環境はそのようなものであるが、エントロピーと物質循環の概念を軸として考えるとき、生命と環境の関係について、深い認識を持つことができ、環境問題をその深い認識のレベルから考察することができる。／環境・生態系破壊の現実の諸様相はいろいろな出版物等でそれを知ることができるので、この本では、それに直接には言及しないで、むしろ、それらを見る視座の確立、すなわち環境の理論の構築を目指す。』先ずは斜めにでも、ご一読ください。

所蔵案内：『物理学に基づく環境の基礎理論
：冷却・循環・エントロピー』
本館2階 一般書架
分類：4 2 6



『遠き落日』

■ 渡辺淳一著 角川書店

医学部生理学講座第1教室 ^{アリタ ジュン} 有田 順

我々は思い込みに気づいたとき、拠り所を科学に求めることがある。「その科学的根拠は？」と。科学とは、見えない真理を見ようとした人間の営みの壮大な伽藍である。しかし、人間の営みであるがために、そこには多くの真理と、これに紛れ込んだ過ちと欺瞞が存在する。このような科学の陰の部分に光をあてた本が多く出版されているが、『遠き落日』は、日本の国民的英雄、野口英世が犯した過ちが書かれている文学書である。「失樂園」の作家渡辺淳一は、偏執的で自己顕示欲が強く性格破綻者としての人間と、エネルギーで果敢な超努力家としての科学者の二つの姿を野口英世の中に見出す。細菌よりも遥かに小さく、当時の顕微鏡では見ることが不可能であったウィルスによって起こることが後に分かる黄熱病に、野口はその病原細菌を発見する。しかし、彼は批判を浴び、結果の追試のためにアフリカに渡り、その病原細菌を再び見ぬまま黄熱病の病魔に襲われる。ヤン・ヘンドリック・シェーンが犯した欺瞞を検証した報道ドキュメンタリー『論文捏造』（村松秀著）もお薦めである。2000年に超伝導のカリスマとして登場。3年の間にトップジャーナルの『サイエンス』と『ネイチャー』に計16編を発表。アインシュタインを始めとする蒼々たる20世紀の天才物理学者達の系譜を継承する科学者として謳われたシェーン。しかし、2002年、あまりにも短い栄光を置き忘れたかのように、論文捏造のため静かに科学の世界から姿を消した。何故、科学の世界は彼の欺瞞を見抜けなかったか。科学は確かさと危うさの混在の世界。

所蔵案内：『遠き落日(上)(下)』
医学分館2階 第三閲覧室
分類：9 1 3. 6/T00/1
9 1 3. 6/T00/2



OID MEDLINE・CINAHL・EBMR・ERIC 画面・機能がリニューアル

OVID社提供のデータベースの画面・機能が2月4日にリニューアルされました。従来よりシンプルなインターフェースとなり、検索に慣れていないユーザでも専門的な検索が簡単にできます。また質問文を入力すると文章を解析し、適応率の高い検索結果を表示する「Basic Search」が追加されたほか、新しい情報がデータベースに追加される度に、検索結果や最新刊情報を自動配信するアラート・ツールが強化されました。

NEW

検索画面

検索履歴

結果の絞込み・拡張

検索結果

結果出力

OvidSP Tip
Add Related Terms in Search Aid provides the option to expand search term.

電子ジャーナル管理ツールAtoZ 日本語による検索に対応

電子ジャーナル管理ツールAtoZにて日本語による検索が可能となりました。タイトルリストの日本語版は現在調整中ですが、近日リリース予定です。

山梨大学附属図書館 THE UNIVERSITY OF YAMANASHI LIBRARY

Electronic Journal A-to-Z

電子ジャーナル管理ツールAtoZ(山梨大学附属図書館) AtoZ検索による日本語による検索に対応しました。 電子ジャーナル利用上の注意書へ移動してください。 図書館からのお知らせ: 日本語で検索はのびのび検索が可能になりました。(12/5)

Index | Titles | Subjects | Search | About This Site | Library information

Find: 心身医学 Search Advanced search

Titles where title name contains '心身医学': 2
Page list: [1. "女性心身医学" / Journal of Japanese Psy page: 1]

女性心身医学 / Journal of Japanese Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology
ENR/PATE-RELS Your Access: 1976 - 2006
ISSN: 1345-2894 Online ISSN: 1345-2894 Other Links: 山梨大学OPAC NtLibrary
Publisher: 日本女性心身医学会

心身医学 / Japanese Journal of Psychosomatic Medicine
ENR/PATE-RELS Your Access: 1976 - 2006
ISSN: 0385-0307 Online ISSN: 0385-0307 Other Links: 山梨大学OPAC NtLibrary
Publisher: 日本心身医学会

back to top ^

講習会 「電子ジャーナル利用講習会」を開催

附属図書館では、平成19年11月28日(水)に「サイエンス・ダイレクト；電子ジャーナル利用講習会のご案内」と題し、講師を招いて、演習形式による利用講習会を開催しました。これは、「Science Direct」を平成20年4月から、利用可能タイトル数が約1,900タイトルになる「Freedom Collection」へ拡大するため、さらにより多くの方に利用していただくことを目的としたものです。当日は、甲府・医学部両キャンパスの参加者は合計56名となり、受講者は各々コンピュータを操作しながら、熱心に講師の話に聞き入っていました。



山梨大学附属図書館子ども図書室開室5周年記念行事

講演会 「絵本の楽しみー『ぐりとぐら』を中心にー」を開催



子ども図書室では、平成19年10月20日(土)、身延大学の伊東久実氏を講師に迎え、「絵本の楽しみー『ぐりとぐら』を中心にー」を開催しました。

この講演会は、平成14年5月に開室した子ども図書室が5周年を迎えたことで、絵本を通して地域の方々と学生と一緒に学ぶ講演会として実施されたもので、幼児・小学生の親子、子ども図書室学生ボランティアなど約50名が参加しました。前半は『ぐりとぐら』を題材にしたお話があり、後半は実際に画用紙を使ったしかけ絵本作りを楽しみました。

子ども達から大人まで幅広い層の参加でしたが、伊東先生の楽しいお話に会場は始終笑いにつつまれ、後半の絵本作りでは、思い思いの絵を描いたかわいらしい絵本が出来上がりました。

なお、当日の様子は【子ども図書室のホームページ】

<http://www.lib.yamanashi.ac.jp/pyonpyon/>で公開しています。



山梨大学附属図書館医学分館・生と死のコーナー関連行事

講演会 「緩和ケアがあって助かった」を開催

医学分館では、平成19年10月11日(木)に生と死のコーナー関連行事として、諏訪中央病院緩和ケア科部長・平方眞氏を講師に迎え、「緩和ケアがあって助かった」と題し、講演会を開催しました。平方氏には、「緩和ケア」に対する誤解や新しい定義についてわかりやすく紹介し、緩和ケアの実症例をもとに緩和ケアのかかわり方や現在の体制の問題点などを講演していただきました。当日は、学生や病院スタッフ、一般の方などを含む約80名が熱心に聴講し、参加者からは、「緩和ケアで、人生の最期が大きく左右されることを強く感じた」

「患者さんと向き合っていく姿勢を教えてもらうことができた」といった感想が寄せられました。

当日の資料や講演要旨は医学分館のホームページ (<http://www.lib.yamanashi.ac.jp/igaku/seitosi/h19kanwa/h19kanwa.html>) で公開しています。



今後のイベント紹介

◆ 山梨大学附属図書館(本館) 近代文学文庫常設展示室の展示入れ替えと 関連行事のお知らせ

現在、常設展示室では「『明星』とそこに集った詩人たち」をテーマとした展示を行っていますが、3月に尾崎紅葉と硯友社の作家たちの作品に入れ替えます。

また、展示の入れ替えに合わせ、近代文学研究者の須田千里先生を講師に招き、文学小講義を開催いたします。須田先生からは、展示作品の紹介も兼ねてわかりやすく講義していただく予定です。

講師：京都大学人間・環境学研究科准教授 須田千里氏
日時：平成20年3月22日(土) 午後2時～4時(予定)
会場：山梨大学総合研究棟



詳細については、山梨大学附属図書館ホームページ等でお知らせいたします。皆様のご参加をお待ちしています。

◆ 山梨県・山梨大学連携事業「子どもと本を考える・連続講座」第5回 シンポジウム「マンガ教育論」開催のご案内

日時：平成20年2月21日(木) 午後2時～(終了予定4時30分)
会場：中央市立玉穂生涯学習館2階視聴覚ホール

報告①：大人はマンガとどのようにつきあってきたか
高橋 英児 氏(山梨大学准教授)

報告②：「アトム」のなかの大人と子ども
長谷川 千秋 氏(山梨大学准教授)

指定討論者：濱田 泰栄 氏(文部科学省)
佐藤 桂子 氏(山梨県立図書館)
コーディネーター：加藤 繁美 氏(山梨大学教授)

主催：山梨県教育委員会・山梨大学附属図書館子ども図書室
参加費：無料



○事前にお申し込みが必要です。
お申し込み・お問い合わせ先
山梨県教育委員会社会教育課
社会教育振興担当
〒400-8504 甲府市丸の内一丁目6-1
TEL 055-223-1771 FAX 055-223-1775
Email: shakaikyo@pref.yamanashi.lg.jp

お知らせ

■ 学外の方への利用案内

本館及び医学分館は、山梨大学以外の大学生をはじめ一般の方々も利用できます。詳細については、<http://www.lib.yamanashi.ac.jp>をご覧ください。本館 Tel:055-220-8066(情報サービスグループ)、医学分館 Tel:055-273-9357(医学情報グループ)にお問い合わせください。



山梨大学附属図書館報
「やまなし」
第5巻第2号

2008年2月1日発行
編集：館報編集委員会
発行：山梨大学附属図書館
〒400-8510
甲府市武田四丁目4-37